

① 次の帝、花山院の天皇と申しました。  
② 冷泉院の第一の皇子な

③ 御母、贈皇后宮懷子と申す。

④ 永観二年八月二十八日、位につかせ給ふ、

⑤ 御年十七。⑥ 寛和二年丙戌六月二十二日の夜、

あさましく候ひしことは、人にも知らせ給はで、

みそかに花山寺におはしまして、

御出家入道せさせ給へりしこそ、御年十九。

⑦ 世を保たせ給ふこと二年。  
⑧ そののち、二十二年おはしました

⑨ あはれなることは、下りおはしましける夜は、

藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひけるに、

有明の月のいみじく明かかりければ、

【ポイント】  
省略されている  
主語・目的語など

【ポイント】  
敬語が本動詞であれば、何  
の動詞の敬語なのか。

【ポイント】  
二重敬語

あらわではつきり おっしゃつ 帝  
⑩「顕証にこそありけれ。いかがすべからむ。」と仰せられけるを、

だからといって 当然御出家をお  
⑪「さりとして、とまらせ給ふべきやう侍らず。⑫神璽・宝剣 は

は、 お わたり給ひぬる 渡りになってしまったから には。」と、栗田殿のさわがし申し給ひける が心を動揺させ申し上げなさつた の

⑬まだ帝出でさせおはしまさざりける先に、手づから取りて、 がお になら なかつ た 前 自分の手で 取つ

春宮の御方にわたし奉り給ひて お 渡し 申し上げなさつてしまつた た ので ければ、

⑭帰り入らせ給はむことは、あるまじくおぼして、 お 帰り になる ような あつてはいけない ことだと お思いになつ 聞きました

そのように申し上げなさつた 聞きました  
しか申させ給ひけるとぞ。

⑮さやけき影を、まばゆくおぼしめしつるほどに、 明るい 月の 光 気がひけると お思いになつ た うち

月の顔にむら雲のかかりて、少し暗がりゆきければ、 面 が かつ 暗くなつて いつ た ので

⑯「わが出家は成就するなりけり。」と仰せられて、 私の のだ なあ おっしゃつ

【ポイント】  
助詞の種類と意味

【ポイント】  
指示語の指すところ

【ポイント】  
二方向への敬意

お  
歩き出し  
なさる  
うち  
歩み出で  
させ  
給ふ  
ほどに、

①7 弘徽殿の女御の御文の、日ごろ 破り捨てず残し 破り残して 御身も 放たず

御覧になった  
の  
御覧じける  
を  
おぼしめし出でて、

①8 「しばし。」とて、取りに入りおはしましけるほどぞかし、

よ  
が  
どうしてこのように  
お思いに  
なつ  
てしまうのですか  
①9 栗田殿の、「いかに、かくはおぼしめしならせおはしましぬるぞ。

の機会を  
逃したならば  
自然と  
支障  
きつと  
出て  
参りま  
しょう  
②0 ただ今過ぎば、おのづからさはりも出でまうで来なむ。」と、

嘘泣き  
なさつ  
た  
とはね  
そら泣きし  
給ひ  
ける  
は。

お  
お  
花山寺におはしまし着きて、御髪下ろさせ給ひてのちにぞ、

退出し  
栗田殿は、「まかり出でて、大臣にも、変はらぬ姿、

もう  
見せ  
こういう事情  
報告  
申し上げ  
から  
いま一度見え、かくと案内申して、必ず参り侍らむ。」

申し上げ  
なさつ  
た  
ので  
と申し  
給ひ  
ければ、

【】（ ）↓（ ）  
【】（ ）↓（ ）

私 騙したのだっ たのか  
「我をば、はかる なり けり。」とてこそ、泣き になっ た  
泣かせ 給ひ けれ。

【】（ ）↓（ ）  
【】（ ）↓（ ）

しみじみと 悲しい  
あはれに 悲しき ことなり ね。

平生

として お仕えしま しょう 約束し  
・日ごろ、よく御弟子にて 候は む と契りて、

【】（ ）↓（ ）

騙し 申し上げ なさつ たよう な の 恐ろしいこと

すかし 申し 給ひ けむ が恐ろしさよ。

【】（ ）↓（ ） 【】（ ）↓（ ）

寛和2年(88)年(6月22日、19歳で宮中を出て、剃髪して仏門に入り退位した。突然の出家について、『栄花物語』『大鏡』などは寵愛した女御藤原し子が妊娠中に死亡したことを素因とするが、『大鏡』ではさらに、藤原兼家が、外孫の懷仁親王(一条天皇)を即位させるために陰謀を巡らしたことを伝えている。蔵人として仕えていた兼家の三男道兼は、悲しみにくれる天皇と一緒に出家するとそののかし、内裏から元慶寺(花山寺)に連れ出した。このとき邪魔が入らぬように鴨川の堤から警護したのが兼家の命を受けた清和源氏の源満仲とその郎党たちである。安倍晴明の屋敷の前を通ったとき、中から「帝が退位なさるとの天変があつた。もうすでに：式神一人、内裏へ参れ」と言う声が聞こえ、目に見えないものが晴明の家の戸を開けて出てきて一行を目撃し「たつたいま当の天皇が家の前を通り過ぎていきました」と答えたのである。

元慶寺へ着き、天皇落飾すると、道兼は親の兼家に事情を説明してくると寺を抜け出してそのまま逃げてしまい、天皇は欺かれたことを知った。内裏から行方不明になった天皇を捜し回った義懐と惟成は元慶寺で天皇を見つけ、そこでともども出家したと伝える。この事件は寛和の変とも称されている。